

黄土高原^{注1)}に咲く目にも彩なる花々 I
陝北延川県高鳳蓮・郭如林の剪紙・布堆画^{注2)}の研究
周路

20世紀も80年代になった頃から、一般に黄土高原と呼ばれる、陝西省延安市一帯で、大掛かりな民間美術全面調査が繰り広げられました。そして多くの民間芸術家(主として剪紙作家たち)が見出され、その中には、後に中国政府や国連組織ユネスコにより“民間工芸美術の名人”と命名された人々がいました。

延安北部安塞県では、曹佃香、高金愛、李秀芳、白鳳蘭、常振芳、藩常旺等が注目され、また延安市郊外では姫蘭英、延安南部富県では張林召、洛川県では王蘭畔、渭北高原旬邑地方では庫淑蘭と、いずれ劣らぬ剪紙名人たちが見出されました。

これら地域では民間剪紙芸術文化が古くから綿々と受け継がれており、貧しい暮らしの中で目を見張るような剪紙作品が作り続けられてきたのでした。この一連の調査によって発見された作家たちの作品が広く紹介されると、すぐに民間芸術研究者たちの目に留まり、関心を集めました。

1980年、中国美術館は、“陝西省延安地区における民間剪紙芸術展覧会”を開催し、北京の文芸界に一大センセーションを巻き起こしました。人々は「中国民間剪紙芸術がグレードアップした」と展示された作品を称えました。



剪紙を^き切る安塞の高金愛と高金愛の剪紙作品

1983年には、安塞県の農民画7枚が“フランス独立サロン”美術作品展で入選し、中国僻地の農民芸術家が世界で認められる切っ掛けとなりました。

1986年、当時北京中央美術学院で教鞭をとる美術教育家・靳之林氏の尽力により、教育とは無縁だった延安地区の6名の老婦人が北京の中国美術最高学府である中央美術学院へ招聘され、造形芸術を学ぶ学生達に彼女たちの創作活動を披露しました。老婦人たちが無造作に切り出す剪紙の作品は、美術の専門的訓練を受けた大学生たちを驚かせ、「竈の灰に塗られた村の芸術家たちが、中国最高の芸術の殿堂を驚愕させた」と中国中の話題となりました。

この時北京へやって来たのは、安塞県から曹佃祥・高金愛(写真上掲)・胡鳳蓮・白鳳蘭の4人、洛川県から王蘭畔、甘肅省平涼県から鄭秀梅の計6名で、



陝西省安塞県の伝統的剪紙・農耕図



陝北六位婆姨和靳之林 1986 年在北京合影 (1986)
靳之林 (北京中央美術学院・教授) と 6 名の陝北老婦人たち

彼女たちは又、ユネスコが指名した「民間工芸美術の名人」第一陣でもありました。この 6 人は、陝西省北部 (以下、陝北) の民間芸術先駆者として活躍しましたが、2011 年 4 月、高金愛が亡くなって、皆故人となりました。

先の調査で見出された民間芸術家たちの住まいを地図の上に印してみると、安塞・延安・甘泉・富県・洛川と、黄土高原の真ん中を北から南へ、一直線で並んでいます。この地方は、北部からは遊牧文化、南部からは漢文化の影響を受けて、剪紙芸術がごく自然に、住居の窓飾りとして生活の中に溶け込んでおり、一方春節に家の門に貼る門神の年画とも影響を与えています。

門神には家庭や地域から災厄を取り除き安寧をもたらすよう祈り、窓飾りの剪紙には来る年の五穀豊穡・暮らしの平安を祈る護符として、それぞれの役目が与えられて来ました。剪紙は、黄土高原地帯で広く伝承され、愛されていますが、その役割、剪紙に込める人々の想いは地域によって違いがみられます。



延安地区行政地図

延安の東 80km に位置する延川地区は、68km 東に黄河が流れており、対岸の山西省 (永和・石楼などの町) との行き来のある地域です。その為 20 世紀 80 年代中頃には、延川県を含む黄河流域では、人々は既に窑洞^{ヤオトン注3}を石で補強した石造りの窑洞に住むようになり、以前よりかなり安全性のある生活が送れるようになりました。この地域では、剪紙は明り取りの窓に貼られて、窑洞の装飾としての役割も担っています。

これに対して、先に剪紙の名人を多く輩出した、黄河からは遠い延安周辺で中軸線上にある安塞付近の村民の殆どは、依然として、山の斜面に直接横穴を掘って作る、昔ながらの窑洞を住居としていました。この窑洞は、陝北の伝統的な住居

であり、古代の穴居生活の習俗を残したもので、なかなか快適な住まいですが、長い間には風雨に曝されて崩れ落ちやすくなるなどの問題がありました。そのような事情で、旧来の窑洞に住む人びとは、一生の間に 2 回、3 回と窑洞を掘り直すこともあり、資産を蓄えることには無縁の生活でした。一生を平穩に暮らすことが彼らの最大の

願望であり、それを祈る方法こそ、祖先から手に、心にと伝えられてきた剪紙——窓飾りでした。この地域に住む人々にとっての剪紙の窓飾りは、精霊への祈りであり、魔除け札であり、吉祥へのあらん限りの願望なのです。

剪紙に込める想いは、地域によって、又個々の人によって様々ですが、この民間芸術を掘り起こそうという波は延安地区・安塞地区から延川地区にまで及んできました。

20世紀80年代の中・後期になって、延川県文化館、延川県政府文物部門が、民間剪紙の全面的調査を実施しました。王芝蘭・劉桂蘭・高鳳蓮など何人かの年配の剪紙名人が探し出され、同時に袁随花・高秀芳・劉曉娟など若い年齢層の既婚女性も見出されました。更に数万点にも及ぶ民族的・芸術的に価値のある剪紙作品が掘り出されました。

また、山西省各地で油絵を描きながらの放浪生活に休止符を打って、黄河河畔の故郷に帰り、先祖伝来の棗の木の世話をしていた郭如林は、既に中年を過ぎていましたが、この頃から剪紙を手掛けるようになり、しかも彼の剪紙技術も名人として認められたのでした。

延川地域で見出された人々の中では、高鳳蓮と郭如林の作品が抜きん出ていましたが、その後、僅か20年の間に、延安地区・陝北地区のみならず全中国の注目

を集める剪紙芸術名人として、自分の作品で家族を養い、家業を支え、併せて数々の中国国家芸術大賞を獲得し、中国美術館で剪紙作品の個展を開催し、CCTVのスタジオで剪紙の実演をし、外国へも度重ねて出かけて中華剪紙芸術の素晴らしさをPRするようになろうと誰が予想したのでしょうか。

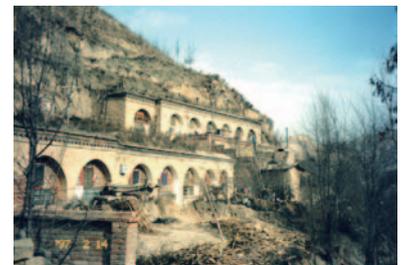
(訳文：有為楠君代)



延川県を囲むように流れる黄河

■注

- 1) 黄土高原(こうどうこうげん huángtǔ gāoyuán)：中華人民共和国を流れる黄河の上流および中流域に広がるおよそ400,000～640,000km²の広さの高原。ゴビ砂漠などの細かな黄砂が300万年近くに亘って堆積したと言われる。
- 2) 布堆画(bù duī huà) アップリケのこと。
- 3) 窑洞(ヤオトン yáodòng) 中国・黄土高原地帯の横穴式一般的住居。崖に横穴を掘り住居としたもの。ヤオトンは真南に向かって掘られていることが多く、冬は暖かく、夏は涼しく、遮音性もあり予想以上に居住性が良い。



窑洞の住居、安塞県にて(1997)

撮影：田井光枝

■周路略歴

1956年、中国安徽省合肥市で生まれる

1980年、安徽皖西学院美術系卒業。中学教師、大学教授、安徽省民衆芸術館学芸員を歴任／1992～94年 版画研究の為日本留／2001～03年、陝北黄土高原延川県文化局副局長を務める傍ら現地の民間芸術を調査／1985年以来、40回を超えて陝北黄土高原に赴き、黄土高原をテーマにした木版画作品を100点以上創作、国レベルでの展覧会で、銀賞1回、銅賞3回、優秀賞など複数回受賞、又、省レベル開催の展覧会での受賞多数回／作品は《中国現代美術全集・版画の部》、《中国優版画家作品選》、《二十世紀中国百年版画展》等の画集他、多数の雑誌に掲載。

■作品収蔵美術館：中国美術館、广州美術館、深圳美術館、青島美術館、四川神州版画美術館、日本千葉県立美術館、広島王舎城美術館／1999年、中国版画家協会による“魯迅版画賞”を受賞／2001年、延安市文聯によって“徳術双馨芸術家”の称号を授与／2003年 延川県政府によって“延川県名誉市民”の称号を授与／2010年“安徽省第二回学術・技術者”称号を授与／安徽財經大學文学・芸術学院教授、修士課程指導教官／陝北黄土高原の民間芸術関連著書、及び、写真集などの出版多数あり